



秋の深まりの中で

副校長 後藤 京子

紅葉が美しい季節になりました。私が大好きな大東小の場所はたくさんありますが、中でも、職員室の副校長の席から見る景色は格別です。樹木の中にひとときわ赤く色付いたヨウシュヤマゴボウ、ニシシギ、イロハモミジ、ドウダンツツジは、青空をバックに見事なコントラストを見せています。

今年度は、コロナ禍により、数多くの学校行事が実施できない状況にあります。そんな中、1年生が、今年度初めて、校外学習として石神井公園にどんぐりを拾いに出かけました。事前に校庭で五感を使って秋探した子供たちは、わくわくした様子で公園に向かいました。公園に着くとそこにはたくさんのどんぐり。「あっ、あった。」「こっちにも。」と次から次へとどんぐりも見つける子供たちの姿がありました。そして「ぼうしが二つついているのをみつけたよ」「あなのあいていないどんぐりをひろったよ」「まつぼっくりはないかなあ」と自分の目で見て、感じたことを、うれしそうに私に教えてくれました。「美しいどんぐりを美しく写真に撮った資料」を使う教室での学習では、学ぶことのできない、自然を肌を感じる学習がそこにはありました。小さくてもちょっと土がついていても、また、いびつな形でも、自分が拾ったどんぐりを愛おしそうに持っている子供たち。形や大きさ、色や色、状態が理想的な形のどんぐりだけがどんぐりではないことを無意識のうちに学んでいました。そんな活動が「自然」を正しく、深く見つめる目を育てているのだということを改めて感じました。

大東小には、このように自然を身近に感じる学習ができる場所が近くにたくさんあります。「地域は教室」「地域は先生」「地域は教科書」と考え、今後も地域の素晴らしい環境を生かした学習を子供たちに提供できるように、地域の皆様のご協力をいただきながら教育活動を充実させていきたいと考えています。

さて、練馬区では、児童が健やかに学校生活を送れるように、11月を「ふれあい月間」として設定しています。東京都教育委員会の調査によりますと、いじめの認知件数はここ4年で10倍に増えました。いじめが「行為の対象となった児童が心身の苦痛を感じているもの」と幅広く規定しているからとの声もありますが、増加の原因はともかく、実際にそのような苦痛を感じている児童が多いのは確かな事実です。苦痛を与えている児童が単なる「からかい」だと思っけていても、与えられている児童が「つらい」「悲しい」と感じられればそれはいじめです。そのことを児童一人一人に理解させ、絶対にいじめは許されないという、心を育て、より良い人間関係を構築していけるよう、本校は全力で取り組みます。より良い人間関係を構築し、いじめ防止のために、以下のことに努めてまいります。

大東小の各教室では、「今日のあったかさん」「今日のヒーロー」のように、友達にしてもらったうれしいことを発表したり、友達のよい行動を認め合って発表したりする場を数多く設けています。いじめを防止することはもちろんですが、優しく、温かい心をもつ児童を育てていきたいと考えています。